

「足湯にて」 長島伸一郎

あらすじ

温泉街の寂れた足湯に中年のパンクロッカー―恭介と、メタボな女形の鈴丸が浸かっていた。変わり果てて互いに気づかないが、二人は幼少期を共にし、美咲を愛していた。恭介は美咲を迎えに帰郷しにきていた。もう美咲は亡くなっているという事も知らずに。二人は、美咲の死を乗り越え前へと進みだす。

本編の文字数…4664文字

○温泉街・バス停

旅館の看板が連なる趣のあるバス停

バスが発車すると降りている小太りのパンクロッカー、高木

恭介（40）

○高木旅館・入口

恭介「……」

恭介、旅館に入らずに去ってゆく

○温泉街

スマートフォンボールの看板など古風な温泉街を下る恭介

○足湯・外観

温泉街の外れの寂れた足湯

○足湯

温泉に足を漬ける恭介

恭介「（一息ついて）……」

恭介が顔を上げると、すぐ真向かいには厚化粧をしたふくよかな体をした女形の鈴丸（35）が汗を流している

鈴丸「……すごい」

恭介「？」

鈴丸「私が来てから、この足湯に入ったのはあなたが初めてです。

何人か来ましたが、みんな引き返してゆきました」

恭介「……へえ」

鈴丸「よくぞ、ここに座ってくださいました。隣も空いているのに」

巨岩を隔てて隣にも足湯はある

恭介「そっちは熱いから……」

鈴丸「浸からずに分かるという事は、地元の方ですね？」

恭介「……」

鈴丸「これは失礼。詮索するつもりは無かったのですが……では、

代わりに私の話を」

恭介「なんでそうなるんですか」

鈴丸「袖触り合うも他生の縁というではありませんか」

恭介「……話を聞いて欲しいって事ですか？」

鈴丸「強制はしません。地元の間人が、こんなノージェンダーな中

年と差し向かいになってまで足湯に足を付けて考え事とは、余程

の分けがありそうだ」

恭介「じゃあ、却下で」

恭介を見つめている鈴丸

恭介「あの……ずっといるつもり？」

鈴丸「もちろん、誰か話を聞いてくれる人が現れるまでは。どうし

ても誰かに心の闇を曝け出したくて仕方ないんですよ」

恭介「……分かりましたよ。で、どうしたんですか？」

鈴丸「実は……男として生きるべきか、女として生きるべきか、悩

んでおりました」

立ち上がり足湯を出ようとする恭介を止める鈴丸

鈴丸「ちよつと、約束が違うでしょ！」

恭介「受け止めきれませんよ、そんな深い問題！」

鈴丸「受け止めてくれよ、俺の心の闇を！ちよつとで良いから、お裾分けさせてくれよ！」

恭介「公共の場で曝け出さないでくださいよ……」

鈴丸「今日、息子がデビューするんです」

恭介「はあ……」

鈴丸「見ての通り、大衆演劇の女形をしています」

恭介「そうなんですか。ただの変態かと思ってました」

鈴丸「失礼な人ですね」

恭介「この街で育てば、女形なんて見慣れます。化粧を落とせばただのおっさんだ。けど、みんな、舞台の上では女であろうとした。アンタのこれは、ただのメタボな怪物だ」

鈴丸「胆っ玉母ちゃん系で売り出してるんで。唯一無二なんです」

恭介「誰もやろうとしないでしょうからね」

鈴丸「実は、お腹のポリウム以外は妻をモデルにしてるんです」

恭介「迷惑でしょうね。仕草とか口調とかアレコレ真似されて」

鈴丸「妻は亡くなりました。息子を産むのと引き換えに……」

恭介「……ごめんなさい、そうとは知らずに」

鈴丸「悲しんでる暇なんてありませんでした。生まれたばかりの赤ん坊を連れて、全国を駆け回らなければなりませんでしたから」

× × ×

出番の合間に赤ん坊の龍平を世話している鈴丸

龍平「……ママ！」

鈴丸「！？」

龍平「ママ！（と、鈴丸に手を伸ばし、笑う）」

× × ×

鈴丸「それが初めて息子が喋った言葉でした。その時、決めました。自分は、ママになろうと……」

恭介「えっ、ママに？」

鈴丸「幸い、私は女形です。妻が果たせなかった母親としての人生を代わりに歩もうとしました」

恭介「いやいや、いくらなんでもそれは……」

鈴丸「旅芸人の子供は転校ばかりで故郷がありません。だから私がお袋という名の故郷になってやろうと思いました」

○（回想） 宿舎・広間

新妻みたいなエプロンを付けて料理をしている鈴丸、鍋に野菜を引きちぎってぶちこんでいる

テーブルで待っている龍平（9）に闇鍋の様な物を持ってゆく鈴丸

鈴丸「はい、お袋の味。たーんとお食べ！」

龍平「……」

○（回想） 教室

授業参観、作文を読む龍平を見守る女装した鈴丸

龍平「僕のお母さんは……多様性の時代にびったりな人です」

掲示されている生徒たちが書いた母の似顔絵、龍平が描いた女装してヒゲを生やしている寝起きの鈴丸の絵

タイトル『まぶたを開けたら見えた母』

× × ×
運動会、母親対抗の玉入れで、カゴにダンクシュートを決める鈴丸

○ 足湯

鈴丸「少し早い反抗期でしょうか、最近ママと呼んでくれなくなっていました」

恭介「てゆうか、今まで呼んであげてたのが偉いよ」

鈴丸「とはいえ、今更パパとも呼びにくいみたいで……そんなせめぎ合いをしている内に、今日という日を迎えたんです」

× × ×
龍平に女形の化粧をしている鈴丸、泣きぼくろを描いている目を開ける龍平

鈴丸「……」

× × ×

鈴丸「その姿が死んだ妻にそっくりで……今日は妻の命日なんです。だから今日、妻の故郷のこの町で初舞台を踏ませる事にしました」

恭介「この町の人だったんですね……」

鈴丸「はい。妻は、公演先の旅館で育ちました」

恭介「えっ……？」

× × ×

女形として舞っている幼い鈴丸を見ている、幼い美咲と恭介
目が合う鈴丸と美咲

× × ×

鈴丸「一目惚れでした。けど、こっちは毎日毎日想っていても、何年かに一度、公演の間だけしか会う事ができなくて……」

× × ×

小学生の頃、一緒に登校する三人

× × ×

中学生の頃、鈴丸に勉強を教えている美咲と恭介

× × ×

鈴丸「だから、俺はこの町から妻を連れ去ったんです」

恭介「……」

鈴丸「でもそれは、俺の独りよがりだったのかもしれない。俺と一緒にならなければ、妻はきっとまだ生きていて……」

× × ×

美咲にそっくりな化粧をした龍介

× × ×

鈴丸「苦労ばかり掛けて、アイツを幸せにしてやれなかった。その事を責められている様な気がして……それで、ここに逃げ出してきました」

恭介「……鈴丸？」

鈴丸「えっ……あっ、もしかして追っかけ？やだなあ、早く言っ
てくださいよ。恥ずかしい話聞かせちゃったなあ。忘れてください」
と、立ち上がり、上がるうとする

恭介「……幸せだったと思うよ、美咲は」

鈴丸「（立ち止まり）どうして、妻の名前を……」

恭介「お前も知っている様に、美咲はあの旅館で仲居をしていた母
親と一緒に住み込んでいた。けど、母親が男と一緒にどこかに消
えてしまつて……」

× × ×

泣いている幼い美咲

恭介「もう泣くな。お兄ちゃんがずっと一緒にいてやるから」

美咲「本当？お兄ちゃんはどこにも行かない？」

恭平「お兄ちゃんは、おじいちゃんになるまでずっと美咲と一緒に
いる。約束だ」

指切りをする二人

× × ×

子守唄を歌い、美咲を寝かしつけている恭介

× × ×

成長してゆく美咲と恭介

恭介N「帰ってくるはずもない母親をいつまでも待ち続けて……美

咲はこの町から離れられなかった」

× × ×

高校生になった美咲と鈴丸、キスをしている

それを見てしまう恭介、自分の想いに気づく

恭介「……」

× × ×

鈴丸「……もしかして、恭ちゃん？高木旅館の息子の恭ちゃん？」

恭介「……久しぶりだな」

鈴丸「うっわー、気づかなかつた！変わり果てたなあ……」

恭介「そんなのお互い様だろ」

鈴丸「えっ、何年振り？」

恭介「ハタチの頃に家を出たから……もう二十年か」

鈴丸「あっ、そうだへビメタ。へビメタの方はどうなの？」

恭介「パンクな……」

○（回想・二十年前）高木旅館・帳場

父親「音楽？」

恭介「……」

父親「ふぎけるな、お前はこの旅館の跡取りなんだぞ」

恭介「もう決めたから」

と、ギターを手に出てゆく恭介

それを見ている美咲と恭介の母

○（回想）温泉街（夕方）

恭介を追いかけてくる美咲

美咲「お兄ちゃん！」

恭介「……」

美咲「どうして行っちゃうの……ずっと一緒に居てくれるって言っ

たじゃない！」

恭介「……歌手になったら、迎えにくる。だから、待っていてくれ」

美咲「……」

去ってゆく恭介

○足湯

恭介「俺は今日、美咲を迎えに来たんだ」

× × ×

客もまばらなライブハウスで歌っている恭介

× × ×

恭介「結局、デビューなんてできなくて、いつまで経っても前座の

前座。……いつの間にか、こんなただの中年オヤジになって」

鈴丸「……」

恭介「こんな事になるんだったら、美咲とずっと一緒にいれば良かったのになって……ただ、美咲が安心して眠れる様に、美咲のためだけに歌い続ければ良かったんだ……」

鈴丸「……」

恭介「音楽もあきらめて、どのツラ下げてって思われるかもしれないけど、美咲に会いたくて仕方なくて。けど、いざ帰って来てみたら、会うのが怖くなって……馬鹿みたいだな。俺の事なんて、待ってなかったのに」

鈴丸「……」

恭介「そうか、もういないのか……けど、お前がこの町から連れ出してくれて良かった。美咲は幸せだったはずだ」

鈴丸「……美咲、ずっと待ってたんだよ。恭ちゃんの事」

恭介「えっ……」

× × ×

ライブハウスに入ってくる、帽子を深く被った美咲
ギターをかきならし歌っている、恭介

美咲「（微笑んで）……」

× × ×

恭介「美咲が、俺のライブを観に来ていた……？」

○（回想）ライブハウス・ロビー

他の出演者と談笑している恭介

CDを物販で買う美咲

美咲「（恭介を見て）……」

ライブハウスを出る美咲

○（回想）街中

余韻に浸り、歩いている美咲

美咲「！？」

向かいから歩いてくる家族、その中にいる美咲の母

美咲母「（気づいて）……」

美咲「……」

美咲のお腹が大きくなっている事に気づく美咲の母

美咲母「……」

兄と妹、まるで美咲と恭介みたいな仲の良い母の子供

美咲「（母に微笑みかけて）……」

通り過ぎてゆく美咲

美咲母「……（と、堪え切れず涙を流す）」

○足湯

鈴丸「もう一度お母さんに会えたのは恭ちゃんのおかげだって、美咲、喜んでた。自分も母親になって、お母さんの事、ちゃんと許す事ができたって……」

○（回想）病室

臨月の美咲、イヤホンをお腹に当てている

鈴丸「何してんの？」

イヤホンを鈴丸に渡す美咲

鈴丸「うわっ、何これ……」

美咲「恭ちゃんの歌」

鈴丸「これ絶対、胎教に悪いぞ……」

美咲「大丈夫、私にとっては子守唄だったんだから……」

○足湯

鈴丸「恭ちゃんがデビューするの、最期までずっと待ってたんだよ」

恭介「……なんで待ってたんだよ。それじゃあ、あきらめきれないじゃないかよ」

涙が込み上げてくる恭介

化粧を落とした龍平、やってくる

龍平「座長！」

鈴丸「龍平……」

龍平「お巡りさんに聞いてみたら、足湯に不審者情報があるって言うから……」

対岸の警察官に手を振る龍平

龍平「やっぱり、座長でした！ご迷惑お掛けしました！」

手を振り返し、敬礼して帰ってゆく警察官

鈴丸「……龍平、今まで変な事ばかりしてすまなかつたな。俺は本当に、お母さんが好きだったんだ……」

龍平「お母さんみたいなお父さんのおかげで、僕、寂しくなかつたよ。きつとお母さんって、こんな人だったんだなあ……」

鈴丸「……」

龍平「だから、座長の仕種を頑張って盗みました。僕は、母さんみたいな女形になりたいんです。母さんに、舞台の上で生き続けてほしいから」

鈴丸「……」

龍平「幕が上がりますよ。お母さんが、待ってます……」

と、手ぬぐいを差し出す

鈴丸「……」

汗と涙を手ぬぐいで吹く鈴丸、吹き終わると化粧が取れ、素顔が顔を覗かせる

鈴丸「（恭介に）……お先に」

足湯を上がり、龍平と一緒に行く鈴丸

恭介「……」

足湯から上がる恭介

○高木旅館・宴会場・ステージ

女形の格好をした龍平が舞っている

袖から龍介を見ている鈴丸

鈴丸「……」

○同・客席

客もまばらな客席

最後尾で龍平を見ている恭介の両親

× × ×

幼い美咲と恭介と恭介の両親、本当の家族の様な四人

× × ×

父の隣にやってくる恭介

母「（涙ぐみ）……」

父「……二人一遍に帰って来やがって」

恭介「……」

おわり